

伝える つなげる ゴースマイル！

制定の経緯

1. 小学校学習指導要領の改訂実施（令和2年度より）を受け本校の教育課程の見直し

1. 小学校学習指導要領の改訂実施（令和2年度より）

①「小学校学習指導要領解説総則編」より

◎これからの時代

① 厳しい挑戦の時代

② 予測が困難な時代

- ・ 生産年齢人口の減少 ⇒ キャリア教育
- ・ グローバル化の進展 ⇒ 外国語科
- ・ 絶え間ない技術革新等 ⇒ 理数教育

③ 急激な少子高齢化

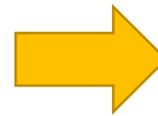
- ・ 一人一人が持続可能な社会の担い手
- ・ 多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人 ⇒ インクルーシブ教育、道徳科
- ・ 社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化していく。
- ・ 社会の成長につながる新たな価値を生み出していくこと

④ 人工知能（AI）の飛躍的な進化

- ・ 雇用の在り方や学校において獲得する知識の意味にも大きな変化をもたらす
- ・ 人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みであるということの再認識 ⇒ プログラミング教育

◎これからの時代に対して学校教育が果たす役割

- ・ 子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、⇒ 主体性・学びに向かう力
- ・ 他者と協働して課題を解決していくこと ⇒ 協調性・創造性⇒非認知能力の育成
- ・ 様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し⇒情報処理・知識理解
- ・ 情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと⇒思考力・判断力
- ・ 複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること⇒表現力が求められる。



◎教育課程全体を通して育成する資質能力

1. 生きて働く「知識・技能」
(何を理解しているか、何ができるか)
2. 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」
(理解していること・できることをどう使うか)
3. 学びや人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等の涵養」
(どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか)

2. 小宮小学校の実態の検証

●学力面

○まじめに授業を受け、板書をノートに書く習慣がついている児童が8割。
 ○文字を丁寧に書く児童が多い。
 ○忘れ物、提出物、持ち物等の学習準備は安定している。
 (家庭の支援が期待できる)

- 意欲と定着に課題
- 算数・国語が好きという児童が少ない。
- 手を挙げる子が決まっていて、全体としての学習意欲はやや低調。
- 基礎学力の定着が不安定 (習得目標未達成児童は半数以上)

●生活面

○「です。ます。」等丁寧な言葉遣いができる。
 ○けがをしないように安全に遊ぶことができる。
 ○情緒が安定している児童が多い。
 ○温かな家庭環境がある。
 ○素直で子供らしい。

- いじめの事実を見ても声を出さない児童が多い。
- あいさつの声が小さく、リアクションも小さい。
- 相手を傷つけない言葉が身につけていない
- 発表の場で自分を解放できない。

よさ

課題

まじめで、人柄はよいが、学びの姿勢が受け身なため、学力が定着せず、自分に自信がもてない。

「未定着→自信のなさ→意欲の低下→積極性が持てない…」悪循環が生まれている。

児童の主体性、積極性を生み出していくことが、悪循環を好循環に変えていくカギとなる。

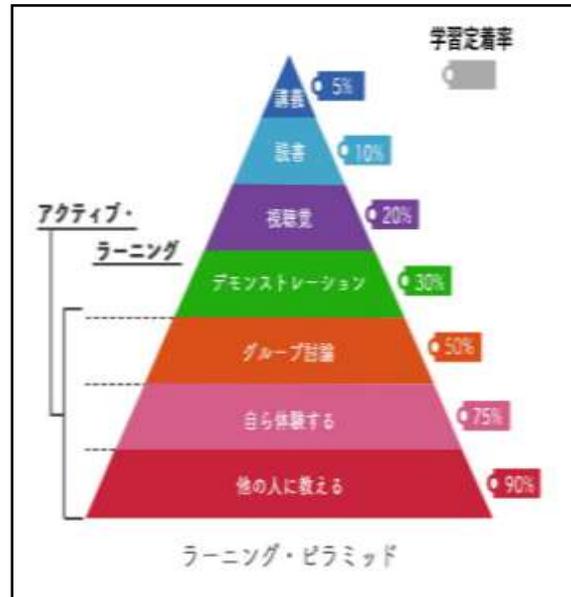
3. 主体性、積極性を生み出すコンセプトの決定

①「伝える」は学習内容を定着させる

今年度の研究授業の際に、その効果を確認したのがラーニングピラミッドの一番有効な手段である。(右インターネット上の2つのグラフ) このラーニングピラミッドの学習定着率の数值は疑問視されているが、その有効性についてはほぼ立証されている。つまり学んだことを学んだままにせず、それをもとに議論し、他者に伝えていくことで、学習内容の定着が図られると考える。

「伝える」

「伝える」ことに児童の意識を焦点化させる



②「伝える」は学びに目的を与える

主体的で対話的な学びと言っても、それは手段であって目的ではない。「伝える」がその学びの目的を与える。

例えば、2年生が動物園に遠足に行くという学びがある。「遠足に行って帰ってきて絵にまとめる」では主体的にも対話的にもなれないが、そこに「遠足に行って気が付いたことを1年生に伝えよう」とすると、子供は「伝える」ために、何を見てどう伝えるのかを考えながら遠足に行くことになる。グループで発表ということであれば「伝える」という目的に向かって自然と主体的で対話的な学びが生まれると考える。

③「伝える」力の育成は積極的な関わりを育む

児童が「伝える」ことに慣れ、自信を持って伝えることができるようになると、自信をもって「話す」ことができるようになり、授業中の発言が増えていくだろう。また現在のいじめの問題における課題は、いじめを見聞きしても「何かされると怖い」などという理由から児童自身が積極的に問題の解決にあたろうとしないところにある。児童が自分の言葉に自信を持ち、相手にしっかり「伝える」力が育てば、生活の中でも積極的な関わりができる児童が増えてくるのではないかと考える。

④「伝える」は学習の好循環を生み出す

「伝える」ことが学習の中に定着し、児童が「伝える」ことに自信が出てくるようになれば、伝えたことの達成感が自己肯定感につながり、それが自信と学びの意欲となっていくはずである。また、伝える活動が学習の定着を生み出していけば、それが学びの喜びと自信となり、より意欲的に積極的な学びの主体者となるはずである。このように、「伝える」を取り入れることこそが学びの好循環を生み出すと考える。

⑤「伝える」は人と人をつなげる。そしてコミュニケーション力を高める。学校は、多様な「伝える」を実現する。

・隣の人に「伝える」 ・グループの人に「伝える」 ・クラスみんなに「伝える」 ・他学年に「伝える」 ・全校のみんなに「伝える」 ・保護者、地域の方に「伝える」 ・SNS等で世界に伝える

このように学校は異年齢集団でしかも保護者地域から支えられて成り立っているという特性から多様な「伝える」場面を作り出すことができる。そしてこの「伝える」という活動によって、それらの人と人をつなげ、それが円滑なコミュニケーション能力の向上に貢献していくと考える。

伝える つなげる ゴースマイル！

伝える

「伝える」ことで、自分の学力の定着を図り、定着することで自信につながる。より能動的な学びが実現する。

学びの好循環

ゴースマイル！

児童一人一人の良さをお互いが理解し、みんなが笑顔になれる学校となる。

つなげる

「伝える」ことを「つなげる」ことで、お互いの理解と共感が広がっていく。そしてより良い人間関係を作っていく。

4. 「伝える つなげる ゴースマイル」の具体的な教育活動

伝える つなげる ゴースマイル！

授業で

「教えてもらう」受動的な授業から「伝え合う」授業へと転換。タブレット端末を「伝える」ツールとして有効活用

運動会で

学校の「伝える」場としての大行事。表現の目的は「伝えたいことを伝える」ことにあり、表現は手段と考える。したがって、必ず伝えたいことを児童全体で理解し、練習でも「伝えたいことが伝わっていくか」を総括していく。伝えたいことを必ず言語化し、表現に取り入れていく。

K
D
D
で

全校朝会・集会で

全校朝会や連絡集会を児童が伝える場として改善。「伝える」を義務化せず、「伝えたい」人が積極的に伝えていく。

文化祭で

学校の「伝える」場としての大行事。相手を意識した文化的表現として、奇数学年は音楽を中心とした表現とし、偶数学年は、演劇を中心とした表現とする。音楽と演劇を交互に行うことで、次の学年へのあこがれと見通しをもつことができる。